

Title	ギルド社会主義の国家観 (上)
Sub Title	
Author	加田, 忠臣
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1920
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.14, No.2 (1920. 2) ,p.278(136)- 289(147)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19200200-0136

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

の標準を進めたる事實に徴し、此要求の道理あるを認むるのみならず、斯る生活標準の進歩の社會全體に有利なることを唱へんとす。

炭坑夫の生活が今日如何に貧しき状態に居るやば、其家屋を見れば、些の疑を挾む能はざるものあり。即ち今日の炭坑村落ほど住居の状態に於て、慘憺たるものは、他に比類を見ざる所にして、南ウエールズ、ヲナルクシャー、ウァーウキックシャー、スタッフォードシャー坑區地方の如き、文明の形跡の何ものたるやを知る能はざるなり。吾人にして坑夫の賃銀上進に關する要求を許容するとするも、總ての炭坑業が會計上の關係に於て、統一せらるゝに於ては、炭坑業に於ける戦前の利益に對して、一片の蠶食を加へざるを得べきことを信せざるを得ず。

(此項未完)

ギルド社會主義の國家觀 (上)

加田 忠 臣

ギルド社會主義又はナショナル・ギルツの思想はサンディカリズムとコレクティブズム(集産主義)とに對する批評から生れたと云ふことが出来るのである。ギルド社會主義の兩者に對する批評は其經濟的方面に於ては産業管理權の問題である。ウエップに従へば産業管理の問題は之を三つに分類することが出来る。一、何が生産せらるべきかの問題換言すれば消費者に供給せらるべき貨物又は勤勞の種類に關する決定、二、生産方法に關する決定、即ち材料の採用、方法の選擇、労働者の選擇、三、人が労働すべき後

説を抱懐しておるであらうか。

件即ち労働場所の温度、空氣、衛生設備、労働の強度、繼續時間並に其報酬として與へられる賃銀の問題之れである。(S. and B. Webb: Industrial Democracy, p. 818)

ギルド社會主義集産主義並にサンディカリズムはこの産業管理の問題に對して各々異なる態度を採つて居る。この態度の相異はまたこれ等三つの主義の國家に對する觀方の相異である。私は以下簡單に集産主義並にサンディカリズムのこれに對する態度と兩者に對するギルド社會主義の批評と最後にギルド社會主義者の國家觀を紹介したいと思ふ。

二

産業管理權問題に關する集産主義または國家社會主義の學説はシドニー・ウエップに依つて代表せらるゝと見るのは極めて妥當である。然らばウエップはこれ等の問題に關して如何なる學

第一の何が生産せらるべきかを決定するの權利は消費者にあるとウエップは主張する。何となれば社會全體に對して最大の満足を得る爲めには消費者の必要と欲望とを最も顧慮しなければならぬからである。故にこの問題に對する決定權は必然的に消費者の掌中になければならぬ。これ等の消費者の欲望が資本主義制度か、または消費者の任意的團結による消費組合かまたは、人民の結合即ち都市又は國家の企業かのいづれによつて最もよく充足せられるかは大問題である。けれども集産主義制度または資本主義制度のもとにおいても共に労働者は生産物の種類の決定權を持つて居ないのは、消費は消費者の最もよく知る所であると共に、労働者は消費者の需要に對して何等の智識もなければ、また労働者は進歩的社會の特色である需要の變化

に對しても、偏見を有するからである。

第二の問題即ち生産材料の採用並に、生産方法の決定權も消費者が之を有すべきである。労働者は自己の修得した生産の方法を最善のものと信じて居て、其改良進歩に對しては大なる偏見を有するものである。新しい機械器具の採用は労働者の地位を常に脅かすからである。労働組合の機械に對する態度は之を歴史的に見てよくこのことを語るものである。労働組合は常に新機械の採用に對して反對し來つた、労働者は常に新生産方法に敵意を示して來た。だから労働者に生産方法の決定權を與ふことは生産技術の停滯、不振を惹起することである。

第三の労働條件の問題は自ら以上の二問題と其本質を異にするものである。労働時間、工場の衛生設備等の労働條件に關して最も深い智識と經驗と利害とを併せ有するものは労働者である。

國家において、向上せしめんとするの任務を有するものは労働組合であると主張する。即ち労働組合は資本主義制度の下における戰鬪的機關としてのみ存在し、將來の國家においては消滅すべしとなさず、之を集産主義國家における官僚的抑壓主義に對抗する爲めと、輿論を誘導すべき機關として、以つて生産者の利益が消費者の利益の爲に蹂躪せらるゝことを防禦せんとするのである。(Webb: op. cit. pp. 818-825)

要するに、ウェッブの考ふる集産主義の國家にあつては、これ等三つの産業管理は地理的の消費者團體即ち國家によりて決定せらるゝのである。之を他の言葉に換へて云へば國家萬能主義である。議會制度による國家萬能主義、即ち消費者專制の社會組織である。

三

然らばギルド社會主義者はこのウェッブの學

る。資本主義制度の下に於ける企業家も集産主義制度の下における役員も労働者の經驗と其心理とを理解することが出来ない。彼等は經費の節減と能率の増進とをのみ其念頭に置く。消費者の側に立つて之を見ても生産物の價格の低廉なることは最も歓迎する所である。故に彼等は常に労働者の労働條件——労働者の幸福の基礎條件たる労働條件に對して深甚な注意を怠り勝ちである。けれども資本主義制度の下においては企業家を通じて、集産主義制度の下に於ては其役員を通じて労働條件の決定權を有する者は消費者のみである。けれども民主的集産主義國家にあつては國民の生活標準の向上は最大の問題である。全人民の五分の四を占むる労働者階級の生活状態に對しては深甚な注意が拂はるべきである。而して、此方面の輿論を指導し、生産者としての労働者階級の地位を其民主的集産主義

說に對して如何なる批判を加へてあるか。ギルド社會主義の立場に立つ者は集産主義に對して猛烈なる攻撃を加へておる。ギルド社會主義の創設者であるエ・アール・オレーヂの如きは其人である。彼は集産主義と個人主義(資本主義)とを對立せしめておるが、この兩者は其本質において相違しないものであるとしておる。即ち資本主義が其資本私有の爲に産業管理權を其手中に掌握することく集産主義も亦國家に資本を集中し、所有することに依つて、産業管理權を掌握せんとするものである。然るに産業の管理と資本の所有と云ふ二つの事は全然別問題である。資本を所有することは單に所有するのみである、然るに産業を管理することは資本を活動せしめる労働を管理することである。然るに個人主義も集産主義も共にこの二つの作用について區別することがないのである。オレーヂは斯

くの如く集産主義と個人主義との作用を論じて次の如く集産主義を評しておる。「集産主義は個人主義の如く資本所有の結果として産業管理権を掌握する。換言すればそれは個人主義の如く、資本を所有することに依つて、労働を管理する権利を掌握するのである。この點において私人的資本家から資本の所有を奪ふと共に、産業管理に對する現在の勢力を繼承せんとする集産主義は單に國家資本主義に過ぎない。何となれば資本主義は資本を所有する資格はまた産業（即ち労働）を管理する資格であると云ふ假定に其基礎を置き、そしてこの事實は國家が現在の資本家階級に代るときにおいても變更せられないからである。」(A. R. Orage: An Alphabet of Economics, P. 14)

斯くの如き批評はギルト社會主義者の均しく、集産主義に對して行ふものである。斯くの如き

てのみ資本家を制御することが出来るのである。

もし労働組合がその利潤の爲に生産する團體——トラストの如き——であるとしたならば、事情はまた資本家制度の生産と異なる所がない。労働組合はその場合には、貨物濫造の爲ではなく、暴利を貪ることに依つて、一般の非難を受けるに至るであらう。然るに之に反して、労働組合が營利團體ではなく、利潤を得ることを目的とせず、其生産物の販賣價格に關係なく、一定の支給を受けるときは、消費者は其生産を指導すべき何等かの手段がなければならぬ。生産者は此場合に於ては消費者を代表する團體と商議するの必要とする。彼等は國家と商議し消費者の組織的意志に依つて指導せられなければならない。ギルド社會主義者の主張せんとする所はこの後の場合である。

批評から出發するギルド社會主義は産業管理問題に對して、必然的に集産主義に反對の態度を採るのである。私はこゝにウエップの學說に對する批評としてギルド社會主義の卓越せる理論家デー・ディ・エッチ・コールの所説を窺ひたいと思ふ。

四

第一の問題即ち何が生産せらるべきかの問題は消費者——財の依つて作らるゝ人ではなく、財が其使用の爲に作らるゝ人——に依つて決定せらるべきである。この解答は一見甚だ明瞭の様であるが、それは消費者または國家に對して生産者の無責任を前提とするのである。資本家制度の下に於ける企業家は理論上恰度この地位を占めるものである。資本家は彼の好むものを其欲する所において、欲する分量だけ、生産することが出来て、消費者はたゞ其購買力によつ

第二の問題は生産過程に關する問題である。

過去の労働組合は新しい生産過程に對して偏見に満ちた判断をしておつたのは事實である。商業的の價值のみを見て、其の労働者に及ぼす影響を顧みることなく新生産方法を採用する無責任な資本家階級に相對して居た事情の下に於ては労働者は生産過程に於ける變改を不信の眼を以つて見るのは當然である。新生産方法の採用は労働者に對して低廉な賃銀と失業とを意味するものであつたからである。だから新生産方法に對する労働者の反對は其新方法の使用せらるゝ様式の如何にある。もし其方法が資本家の手の中において利用せらるゝならば労働者は之に對して反對し、其生産方法に於ける變改が労働者全體として、日々の労働を軽減するものならば彼等は之を歓迎するのである。故に過去及び現在に於ける新生産方法に對する労働組合の態度

は絞取の危険が除かれても尙ほ労働者の新生産方法に對する敵意は存すべし、と想像する理由とはならないのである。

また之を消費者の側から觀察して見ても消費者は其要求するものを得ればそれでよいので、其物が如何に生産されたかは彼に對しては重大な問題ではないのである。消費者は其欲求する貨物の得られざることに限つて、干渉の権利を要求するのである。けれども消費者に採つて他に一つの關係のある事項がある。一生産過程が甚だ心持のよいものであるが不經濟の場合に於ては消費者は生産者が其過程を採用することに依つて高價な犠牲を拂はなければならないことである。もし労働組合が利潤を目的とする營利團體である場合には消費者は其商業關係に依つてのみ消費者の利益を擁護し得るのであるけれども労働者が一定の支給を保證されて居る場合

には生産者は消費者を顧みることなく其欲する生産過程を採用するに至るであらう。然しこの問題は組合またはギルドがそれ自らの雇主となり國家と商議することに依つて解決し得るのである。

更に生産者側からこの問題を積極的に見ると生産過程は其労働に於ける快、不快の分るゝ所であり、安全、危険の分岐點である。であるから生産者はこの産業管理の問題について決定權を有する資格が充分あるのである。

第三の問題は労働條件の問題である。將來國家における労働組合を全然獨立の團體であつて國有産業の下に於て其労働條件に就いて國家と商議を行ふものとする人は生産者の産業管理を此範圍に限定し、労働組合の機能を取引に限定せんとするものである。彼等はトレード・ギルドを擴張する主張と以上の所説とを合一して

ある。トレード・ギルドは賃銀、労働時間並に産業に涉つて管理を行ひ、生産者の管理を夢想に等しいものとするのである。トレード・ギルドの賃銀並に労働時間の決定は、消費者の道徳によつて定められた生活標準に従つて消費者によつて賃銀と労働時間を決定する事である。而して、彼等は労働委員會の制度を擴張して、之を生産者に與へ様とする。労働委員會そのものは優秀なものに相異ないけれども労働委員會のみを以つて生産者に對する産業的權利の全體とするならば、それは明かに労働界におけるサンディカリズムの傾向を觀過したものである。國有産業にあつて、法律を以つて決定せられた最低賃銀は最高賃銀となるの傾向があるであらう。國有産業制度の下においては他に競争的産業の存在するのなれば、賃銀は消費者の好意に依つて決定せらるゝのである。ある特殊の

問題に關しては管理者に對して同盟罷工を施行することが出来るが、賃銀と時間とに關する同盟罷工は社會の道徳的標準に對する同盟罷工である。そして社會の立場からすれば其道徳的標準の低しと云ふことに對する非難に對しては之を許容することをしないであらう。而して現在の状態を以つて見れば労働組合に對して賃銀と時間とを管理することの必要は其會員が正當な賃銀を得ずして、過度の労働に従事してあるからである。

而して産業管理權の要求は高き賃銀と短き労働時間に對するものとは其本質を異にしてある産業條件と其過程とを管理せんとするのが其要求の本質である。而して、労働者の要求の充足されなければならぬのはこの範圍に於てであり、集産主義制度の下における労働委員會と強固なる獨立の労働組合とでは之を充足すること

が出来ないのである。(G. D. H. Cole:—The World of Labour. pp. 353—362)

以上が集産主義の學說に對するギルド社會主義の批評である。私は以下サンディカリズムと其批評に就いて述べなければならぬ。

五

ギルド社會主義はサンディカリズムに對しても亦批判的態度を採るのである。けれどもギルド社會主義はサンディカリズムに對して深甚な同情を表す。コールはギルド社會主義とサンディカリズムとの關係について次の様に云つて居る。「ギルド社會主義のサンディカリズムに對する關係は國家社會主義の資本主義に對する關係である。國家社會主義は國家資本主義である——團體的基礎の上における資本主義である。國家社會主義の目的とする所は不規則的の私人的資本家に代ふるに全社會の團體的營利である。」

collective profiteering を以つてせんとするにあつては、然るにギルド社會主義は社會主義の基礎の上におけるサンディカリズムと云ふことが出来る。サンディカリズムは團體的個人を萬能ならしめ、團體的營利に對する豫防において失敗したのである。ギルド社會主義はサンディカリズムの精髓である産業民主主義を保持するのには、サンディカリズムは社會共同の必要と共同の政策に對する最高の考察を忘れたのである。(Cole:—The Meaning of Industrial Freedom. p. 40)

「概して言へばサンディカリズムは他の其背後に生命の躍動する様な學說と同じ様に其主張する所に正しく其否定する所において誤つて居る」(Cole:—The World of Labour. p. 367)とのコールのサンディカリズム批評は彼の言葉を借りて言へば次の通りである。「もしサンディカリ

ズムが現今の國家が壓制者の掌中にある一の道具であると云ふのみでなく、サンディカリズムが生産者の機關以外の如何なる共同意志表現の形跡をも全體之を破壊するのを目的とする意味に於て非政治的であると云ふならば、サンディカリズムは顧みるの必要な學說である。然し乍らもし、サンディカリズムが労働者の生活と労働とを管理せんとする労働者の要求を充足することを意味すると解すならばサンディカリズムは尙ほ社會主義を官僚的集産主義よりもよきあるものとせずことの出来る生命力となるのである。」(Self-Government in Industry. p. 321)

この批評で明白である様にギルド社會主義はサンディカリズムの國家の否定を非とし、其生産者に對する産業管理權の要求に同情を表すのである。

けれどもサンディカリズムの生産者による産

業管理權の要求は、生産者のみを社會組織の要素たらしめ様とするのである。彼等の主張する所は消費者の犠牲において、生産者專制を主張せんとするものである。産業管理の三問題を全部サンディカに於て決定せんとするものである。故に彼等は國家を否定する。國家は單に階級闘争における權力階級が他の階級を絞取せんとして組織した、一の手段に過ぎないものと主張し、其必然的結果として労働者の創設すべき將來の社會においては、國家なるもの、存在を許容しないのである。然し斯の如き主張は國家の機能を現在に於ける機能のみと解するに依るのである。サンディカリストは何を生産すべきかの問題に對して生産者の管理を主張するものであるが、貨物の需要と供給とを調和せしむべき機關として労働取引所 Bourses du Travail を設置すると云ふ。この労働取引所なるものは集産

主義制度の下における國家に代はるべきもので各部の生産者に生産命令を發する機關である。然し乍ら問題は何か生産さるべきかと云ふことは實際之を生産する労働者に關することであるか、または社會に關することであるかと云ふことである。この問題は生産者が何を生産するべきにおいても生産者として關係する事項ではない。故に其擴張した機能を有する労働取引所または労働組合會議は事實上變形した國家または自治體に過ぎないものであつて、それは決して、眞の生産者の團體ではなくて、不完全な消費者の團體に過ぎないものである (World of Labour, p. 353) オレーヂも同じくサンディカリズムを批評して云ふ。「國家資本主義に對する反動としてサンディカリズムは國家を否定する所まで行つた。然しながら實際的思想に於いては國家もサンディカも共に認められて居る。この事

が實質上、近時のフランスのサンディカリズムをして英國のナショナル・ギルツの主義と一致せしめたのである。」(Orange:—op. cit. p. 153) 以上私は、集産主義及びサンディカリズムの産業管理問題に對する態度とギルト社會主義のこれに對する批評の一般とを窺つた。集産主義における國家萬能主義もサンディカリズムにおける國家の否定も共にギルト社會主義の是認する所でなかつた。而して現今の社會主義が集産主義を意味するものとしならば「集産主義は益々實業的計劃となり、愈々其感激すべき理想を失ひつゝ、あつて、社會主義は煩悶して居るのである。もしも、社會主義がサンディカリズムにおけるよきものを採り、之を集産主義におけるよきものと調和するならば、それは生氣ある主義に復活し、益々活氣あるものとなることが出来る。」(World of Labour, p. 369) ホールは斯く

の如く社會主義の淨化をサンディカリズムと集産主義との長所に求めて、其ギルド社會主義を主張するに至つたものである。

斯の様に産業管理問題に對する態度は集産主義に於ては消費者專制であり、サンディカリズムに於ては生産者專制である。ギルド社會主義はサンディカリズムの主張に同情を持ちながら尙ほ之に對して全部的の肯定を與へないのである。ギルド社會主義は前にも述べた様に産業管理における生産者の重要を高唱する、けれども彼等はまた消費者の存在を無視することが出来なかつたのである。即ちホールの言の如くサンディカリズムと集産主義におけるよきものを取つて之を綜合せんと試みたのである。之を一面から言へばサンディカリズムと集産主義との妥協である。だからベルトランド・ラッセルはギルド社會主義は英國人の妥協を好む精神の發露で

あると評してある。(B. Russell:—Proposed Road to Freedom, p. 115) 然らばサンディカリズムの國家の否定を非とし、集産主義における國家萬能を非とするギルド社會主義に於ける國家とは何であるか、其機能如何。(以下次號)

「四十エキュの人」

高橋誠一郎

佛蘭西が最初の經濟學派たる Physiocrates を産したるは、ユーモリストを多く出せるを以て顯著なる時代なりしに拘らず、彼れ等の徒は孰れも皆な機智を缺き、華麗を失し、端嚴莊重にして、又た屢々陰鬱鈍重なる筆致を以て、乾燥無味なる問題を論じたり。而して宛も彼れ等のみ獨り永劫不變なる眞理の受託者たるが如く、